

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 小原 俊行

本論文は、居住形態・行動論と環境適応論という最新の考古学的な研究視点に基づいて、後期旧石器時代に関東地方北西平野部、特に群馬県域を開発した人類集団の通時的な行動軌跡の詳細を明らかにした、完成度の高い実証性に富む意欲的な研究成果をまとめたものである。日本の旧石器時代研究は、南関東台地部の調査・研究の蓄積を中心に、それを列島全域に敷衍化して議論されてきたため、ややもすると関東モデル偏重の技術型式論的研究が先行し、地域の個性的な歴史的展開過程の研究が遅れていた。群馬県域では1990年代以降遺跡の発掘調査と各種の古環境データの蓄積が進んだことにより、先史人類集団による資源開発行動の時間的変遷を解明することが可能となった。本論文は、これら資料を丹念に分析し総合することで、きわめて説得力のある内容に結実している。

本論文は6章からなり、第1・2章では、先行研究の解題とその批判的再検討によって研究の目的と問題の所在を抽出し、研究方法に関する諸概念を整理している。第3・4章では、関東北西部の地理的環境と石材等の資源環境を整理し、続いて各時期に周辺火山から供給された降下テフラ(火山灰)を時間的な指標に用いて、地形発達史と古環境(気候・動植物相)の変遷を詳細に跡付けた。第5章では、徹底的な石器の技術形態学的・構造論的検討に基づいて既往の編年観を一新し、後期旧石器時代全体を12段階に区分するという画期的な新編年を提案することで、第3・4章の地形・環境変遷との対応関係を詳細に解明することに成功している。

本論文の中心となる第6章では、以上の分析に基づいて、後期旧石器時代の2万年間にわたり群馬県域に展開した人類集団の歴史的動態を、環境適応行動と居住形態の変遷という視点から丁寧に説明した。例えばこれまでは、大規模な火山災害等を時代変遷の契機として説明する傾向が強かったが、歴史の変化はそのような単一のイベントに起因するものではなく、複数の要因による相互作用に起因することを明らかにしたことは注目すべき成果と評価できる。さらに群馬県域を取り巻く周辺地域への目配りも欠かしておらず、居住領域や行動システムといった社会的側面にまで止揚することによって、旧石器考古学における地域研究のひとつの研究モデルを提出したと言える。

惜しむらくは、先史人が対象とした開発資源の実態(対象等)に関する言及に乏しい点が挙げられるのだが、それは日本列島の旧石器研究全体に当てはまる課題でもあり、本論文の意義を損なうほどのものではない。

以上より、本委員会は博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと認めるものである。